

書閣閉來冬變春 書閣閉ぢてより冬の春に變り

梅花獨笑向啼人 梅花独り笑みて啼人に向かふ

雖知世上必然理 世上必然の理を知ると雖も

猶恨門前斷舊賓 猶し恨めし門前に旧賓の断ぬるといふことは

(小島憲之著『國風暗黒時代の文學中(中)』P 1467～P 1469)(傍線筆者)  
以下、小島憲之氏の詳細な考察の一文を引用しながら道真の「495 梅花」との比較を試みたい。

まずこの『凌雲集』の作品は、小島憲之氏の考察によると「文章生滋野貞主の〈初春一月、大学頭菅原清公の旧宅に立ち寄ったところ(その荒廢した有様をみて)心にいたみ悲しみ、布瑠・巨勢志貴人・藤原の三秀才にその悲しみの心を書いて贈った詩〉に唱和した御製(嵯峨天皇御作・筆者注)」とある。句意は、小島憲之氏の一文を引くと、

(菅原家の)書殿が閉鎖されて以来、冬も過ぎて春になった(その庭の)梅の花だけが咲いて、(ここに)立ち寄つて旧時を思ひつつ(嘆く)人に相對する(相對してほころぶ)。

昔を偲んで泣く作者に向かつて、梅の花だけひとり淋しく咲きかかるわびしい風景。

(移り变りの行なはれると云ふ)世間の必然の道理をよく承知してゐるとは云ふものの、やはり(盛時とは違つて)門の前にふるなじみの賓客が絶えたのは恨めしいことだ。

筆者はこの詩の二句目「梅花獨笑向啼人」の表現に殊更、注目してみたいと思う。小島憲之氏はこの二句目につ